

いきものがかりの言語学 4 ～名詞修飾表現

Linguistic Analysis of Ikimonogakari's songs 4 : their relative clause expressions

山 田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

日本語には、述語の連体形や「の」を介し、文に近似した語の連続を音声的な切れ目なく名詞に前置することで、さまざまな意味・機能を表す装置が存在する。一般に、名詞修飾や連体修飾と呼ばれるこの装置は、英語における関係代名詞のような特別な形式を被修飾名詞と修飾節との間に介在させないため、国語教育では意識されることが少ないが、日本語研究においては議論喧しい。

すでに広く知られていることとして、名詞修飾表現の分類については、被修飾名詞が名詞修飾節内の述語に対し格関係を有すると認められる内の関係の名詞修飾と、そのような関係が認められず主として内容を表す外の関係の名詞修飾（あるいは内容節）という構造的な分類に加え、名詞修飾節の表す内容が被修飾名詞の指し示す範囲から一部を切り出す機能を有する限定的名詞修飾と、被修飾名詞を含む主節が表す出来事背景となる非限定的名詞修飾との2つに分かれるという機能的な分類がある。この分類が基本となることに異論は無いが、実際に用いられている名詞修飾節の機能を考えたとき、特に、修辭的技法が多用される歌詞などの文体においては、分類の困難さにも直面する。

本考察では、実際に使用されている名詞修飾表現の機能を考えるため、今年でメジャーデビュー10周年を迎えた神奈川県出身の3人組J-Popユニット「いきものがかり」を取り上げ、彼らの歌詞における名詞修飾表現を分析する。彼らの楽曲は、主に男性メンバーである水野良樹と山下穂尊によって制作されているが、ボーカルを担当する吉岡聖恵も少数ながら楽曲提供をしている。今回は、主に、デビュー10周年を記念して編まれたベストアルバム『超いきものばかり～てんねん記念メンバーズBESTセレクション』に収録された作品の歌詞を中心に（同アルバム以外の出典には「*」を付す）、彼らの歌詞に見られる名詞修飾表現を機能・構造両面から分析する。なお、歌詞の引用は、同ベストアルバムの歌詞カードによる。ただし、名詞修飾節を表す下線、ならびに被修飾名詞を表す枠は、本稿筆者が付け加えたものである。

2. 考察の前提確認

上述のとおり、日本語の名詞修飾表現は、名詞修飾節を被修飾名詞の前に置くだけでできあがる。形態的には、いわゆる連体形や「の」を介するという特徴はもつものの、関係詞のような特別な形式をもつわけではない。これは、動詞を最後に据えるSOV型言語によく見られる特徴であるが、これによって、「どこからが名詞修飾節であるか」が不明瞭になる場合もある。

だから

泣いて 笑って つないだ この手 は 最後の瞬間まで 離しはしないで

この道の先を またふたりで

歩いていこう… 歩いていこう…

(作詞：水野良樹「茜色の約束」)

「この手」にかかる部分は、「つないだ」だけであるのか、それとも「泣いて笑ってつないだ」であるのか、音声的特徴がメロディによってかき消される歌詞においては、形態的標識がなく意味から考える以外に方法はない。「泣いて笑って」は「歩いていこう」にかかる可能性も否定できない。

さらに、歌詞では、通常、句読点が用いられないことから、そもそも名詞修飾表現なのか否か判別できないこともある。次の例は、「立ち止まる」でいったん文が終結するのか、名詞修飾節として「空」にかかっていくのか、音声的な手がかりを含め決め手がない。

交差点のなか 立ち止まる 空 だけが広くて

「がんばらなきゃな…」 まだ君に 会えない

(作詞：水野良樹「ラブソングはとまらないよ」)

また、次のように、名詞修飾節における主題「は」の不在も、十分な証拠となり得ない。

終わりという始まり 始まりという名の終わり 僕達はまだ歩いてく 僕達がまだ歩いてく

その先に未知なる癒えぬ痛みが待つとも ひたすらに続く未来が見たい

(作詞：山下穂尊「心の花を咲かせよう」)

1行目最後のフレーズに格助詞「が」が見られることから、主題化に制限のある名詞修飾節の可能性もあると考えられる。しかし、2行目冒頭に指示詞「その」が用いられていることに加え、1行目と2行目との間に音調上の間断が感じられることから、一聴して名詞修飾表現とは捉えられにくく、総記の「が」の解釈も否定し得ない。いずれにしても、決め手となる形態的特徴がない。

また、何をもって名詞修飾表現とするかの難しさもある。「ぼくらのゆめ」のような2名詞を格助詞「の」でつなぐのも名詞を修飾する表現のひとつではあるが、通常は、修飾部分に述部を伴うもののみを名詞修飾表現として扱う。ただし、「赤いかさ」や「確かな輝き」のように、名詞を単独の形容詞類が修飾する場合には、形容詞類を述語とした節を形成しているとは見なさない。

では、動詞を用いた「散らかる部屋」や「ありふれた道」が名詞修飾表現なのかと言えば、難しい。「ありふれた道」の修飾部分には、他の参与者を表す名詞句が想定できず、形容詞同等の表現であると考えられるが、「散らかる部屋」は「服が散らかる部屋」と、「散らかる」という述語が名詞句を取れることから、一応、名詞修飾節と捉えておくほかないと考える。このような連続性があるが、本考察では、一語による性状規定表現を除く、事態による修飾を名詞修飾表現と捉え考察の対象とする。

一方、時間等を指定する節の扱いも、悩ましい問題を有する。

冷たい風に吹かれる 日 は 「あなた」をだいじにして

(作詞：水野良樹「あなた」)

ひとりきりで始まった この都会の 日々 は わたしの夢なんだ

(作詞：水野良樹「ラブソングはとまらないよ」)

時間節は、名詞を修飾する構造になってはいるが、その機能は、出来事の時間指定に限られ、名詞修飾表現の研究からは除外されるのが通例である。上記用例のうち「あなた」の例は、その時間節であり、下の「ラブソングはとまらないよ」の例は、主節述語「夢なんだ」の主語が名詞修飾節を伴った「日々は」である。本考察では、下の例のみ、名詞修飾表現と捉え考察の対象とする。

さらに、名詞修飾節の分類についても、どちらとも解釈可能な例が存在する。

だから歩き出そう この手を広げて 今日を抱きしめる **旅** を始めよう

(作詞：山下穂尊「ワンゴール」*)

あこがれた夢のこと 話した **瞳** は

美しくて ずっと 見つめていたくて もっと好きになってた

(作詞：吉岡聖恵「白いダイヤリー」)

泣かない **恋** をしたいよ

ひとりじゃないと伝えるよ

わたしだって強くなれたんだ

(作詞：水野良樹「キラリ」)

「旅で今日を抱きしめる」という内の関係の名詞修飾表現なのか、それとも「今日を抱きしめる」という内容の「旅」なのかも判別しがたい。2番目の例では、「瞳が話す」という擬人化なのか、「話したときのあなたの瞳」なのか、判断が付かない。最後の「泣かない恋」も、「恋で泣かない」とも言えるが、内容を示しているとも考えられる。被修飾名詞に対し修飾節を前置するだけで名詞修飾表現が出来上がる日本語において、特に、表現上の技巧が多用される歌詞では、通常、結びつかないような名詞と述語との関係が想定される場合もあり、名詞修飾表現の解釈に困難さを与えている。

本考察では、このように、名詞修飾表現であるか否か、どこからが名詞修飾節であるか、どのような種類の名詞修飾表現であるかについて、若干の解釈の幅が存在することを前提に考察を進める。

3. 名詞修飾表現の分類に対する2つの疑問

名詞修飾表現については、次のような分類が一般に知られている。

- ① 内の関係の名詞修飾・外の関係の名詞修飾
- ② 限定的名詞修飾・非限定的名詞修飾

さらに、①の外の関係の名詞修飾に関して、日本語記述文法研究会編(2008)は、内容補充修飾・相対名詞修飾・付随名詞修飾の3つに分類し、内の関係の名詞修飾を格成分名詞修飾と呼び変えている。

名称の問題はさておき、問題は構造的分類と意味・機能的分類が混在していることにある。すなわち、①が被修飾名詞と名詞修飾節内の述語との格関係の有無という構造的分類であるのに対し、②は被修飾名詞の定・不定とも関連する意味・機能的分類である。また、格関係のない、いわゆる外の関係の名詞修飾についての下位分類にも2つの分類基準が存在する。それは、内容補充という意味・機能的分類がある一方、相対名詞修飾というSOV言語であるがゆえの構造的的特質による分類が併存する点である。これら2つの基準が、はたして同次元に並びうるものであろうか。さらには、付随名詞修飾も独立した分類として適切であるか疑問がある。

実際の用例を分析していると、これら構造的分類と意味・機能的分類の間に落ち込む用例が見えてくる。まず、①に関するものについて少し考えてみたい。

3.1 内容を表す内の関係の名詞修飾は存在するか

従来の分類では、名詞修飾節が被修飾名詞の内容を表すには、被修飾名詞が名詞修飾節内の述語に対して格関係を有さない、いわゆる外の関係の名詞修飾でなければならないと考えられている。たしかに、次のような名詞修飾節は、内容を表したものとなっている。

誰かが差し伸べてくれてる その手を握る **勇気** が僕にあるかな
 (作詞：水野良樹「なくもんか」)
 いつになく輝いたあなたがいる 一人じゃないと知った **強さ** がある
 (作詞：山下穂尊「いつだってぼくらは」)

被修飾名詞「勇気」および「強さ」に添えられた節「誰かが差し伸べてくれてる その手を握る」「一人じゃないと知った」は、それぞれの内容を示している。この場合、被修飾名詞「勇気」「強さ」は、名詞修飾節内の述語「握る」「知った」と格関係をもたない。

このような典型的な内容を表す名詞修飾節は、いきものがかりの歌詞において、説明口調になりすぎて上手に用いないと硬くなってしまうためか、実際、多くは見られない。彼らの歌詞を分析してより多く見られるのは、次のような用例である。

ひとりじゃないんだよと うまく伝えられずに
 たどりつくのはいつも 飾りの無い **こたえ** で
 (作詞：水野良樹「あなた」)
 さくら ひらひら 舞い降りて落ちて 揺れる **想いのたけ** を抱きしめた
 (作詞：水野良樹「SAKURA」)
 だから
 涙も 笑顔も つないだこの手も 幾重の写真に負けない **思い出**
 (作詞：水野良樹「茜色の約束」)

いずれも、「そのこたえには飾りが無い」、「想いのたけが揺れる」、「思い出が幾重の写真に負けない」のように述定可能な、いわゆる内の関係の名詞修飾表現である。であれば、これらの名詞修飾節は被修飾名詞を限定しているか、あるいは、非限定的に主節に対し何らかの関係を表すものであるのか。答えは、どちらもすなおに首肯しがたい。

たしかに、「飾りの無いこたえ」はさまざまある「こたえ」の中から「飾りの無い」という性質を備えたものを限定しているとも考えられなくないが、そのほかは明らかに限定ではない。むしろ、「飾りの無い」も含め、これらの修飾節は被修飾名詞の内容的性質を表していると言ってよいのではないか。

内の関係の名詞修飾を考える際、名詞修飾節に動作や状態が表された用例を用いることが多いが、内容的性質が表されることもある。これも「内容」の定義次第だが、意味的な分類である「内容」が、構造的な分類である内の関係・外の関係と合致しなければならない理由はどこにあるのであろうか。意味的に内容を示す名詞修飾節が、典型的に外の関係に多いことは認めるとしても、被修飾名詞の性質を名詞修飾節が表す場合には、内容的な意味をもちうるのではないか。限定・非限定の分類とも合わせ、さらに考えなければならない。

3.2 非限定的名詞修飾の下位分類

日本語記述文法研究会(2008:88ff)では、非限定的名詞修飾を次の3タイプに分類している。

- ① 名詞についての補助的な情報の付加
- ② 主節の事態に対する背景的な事態の提示
- ③ 主節の述語が要求する事態の提示

①は、「ある事物を文脈に導入したり、談話の中である事物に言及する際に、聞き手に補助的な情報を与えたり、聞き手がすでにもっている情報を想起させるために、修飾節が加えられる場合(同:

p.88)」であり、②は、「逆接的内容、対比、原因・理由、継起、付帯状況といった」「背景的事態」を提示するもの、さらに③は、思考や認識、感情、知覚などの動詞によって要求される事態内容が名詞修飾節に示されるというものである。

それぞれ理想的には上記分類が可能であると考えられるが、次のような例はどうであろうか。

Ah 夢に見てた こがれていた キミ がいる
あの空に浮かぶ いくつもの 光集め 恋は輝く

(作詞：吉岡聖恵「キミがいる」)

いつか今日を思い出せるかな
あこがれる 未来 でもね
ならんで歩きたい

(作詞：水野良樹「キラリ」)

いつしかあなたの横顔 のぞく ことが好きになって
気付いて 赤らむ あなた に キスをねだると怒られた

(作詞：水野良樹「コイスルオトメ」)

いずれも連用的な表現に述定することも難しく、②とは分類しがたい面をもつ。「聞き手に補助的な情報を与え」と言えば、すべてが当てはまるが、その補助的情報を付与することと「背景的事態を提示する」こととは、どのように異なるのかも判然としない。

従来からの分類は、典型的な用例を分類することによって得られた、レベルの異なる基準によるものであり、实例を見るとどこに分類すべきか迷うものも少なくない。しかしながら、より包括的にすることで抽象度だけ上げても分類として役立つ。であれば、別の観点から考えておく必要がある。

4. 談話から見た名詞修飾表現の使用動機

前節で得た問題点を解決するために、歌詞というひとつながりの言語資料、すなわち談話の観点から名詞修飾表現の使用動機を考えてみたい。

限定的名詞修飾、ならびに内容を表す名詞修飾節の一部は、非存在が情報伝達上の瑕疵をもたらす。

そばにいてほしいよ かけがえのない ひと

(作詞：水野良樹「あなた」)

名詞修飾表現のない「ひと」は、当然、この文脈で単独では(たとえ、「ひとにそばにいてほしいよ」のように倒置を戻したとしても)用いられない。また、「(その)ひとは、かけがえがない」のように述定表現にして、この文脈で用いることもできない。つまり、名詞修飾以外の表現は考えられないのである。3.1節に挙げた内容節も、基本的に談話上省略することができない(e.g. 「*いつになく輝いたあなたがいる 強さ がある」)。つまり、談話上、価値ある情報にするために必要な名詞修飾節として、これらは用いられているのである。

一方、非限定名詞修飾表現は、定義上、名詞修飾構造を用いなくとも同様の意図が表現できるはずであるが、実際には、述定して同様の内容を表せるものとそうでないものがある。まずは、述定しがたい非限定的名詞修飾表現についてその使用動機を考え、次に使用が任意である非限定的名詞修飾に関し名詞修飾構造選択の動機を、いずれも談話における当該文の機能の点から考えていく。

4.1 被修飾名詞の円滑な導入

談話における文の役割は、おおよそ、参与者導入、状況描写、参与者の動作・性状描写、心情描写に分けられる。

まず、談話参与者に関し、いきものがかりの今回分析対象とした楽曲はすべて、一人称と二人称であった。このうち、一人称を「導入」することはあり得ない。二人称に関しては、参与者導入に背景的情報を加えることがある。それが、次の例である。

Ah 夢に見てた こがれていた キミ がいる
あの上に浮かぶ いくつもの 光集め 恋は輝く

(作詞：吉岡聖恵「キミがいる」)

被修飾名詞「キミ」は、場面で特定されるべき人物である。当然、名詞修飾節がなくても人物特定に不都合はない。しかしながら、この曲の冒頭のフレーズとして修飾表現のない「キミがいる」では、単なる存在の提示でしかなく、参与者の導入にはならない。行為や性質を動詞あるいは形容詞等で記述することは、情動的に意味をもつが、単なる存在提示は、物語の冒頭で、時間と場所の舞台設定をする以外、有意味な談話要素とならない。つまり、この部分で、名詞修飾表現は談話的に必須な要素として用いられているのである。

これは、3.2節で見た日本語記述文法研究会編(2008:87ff)の①(e.g.「昨日ね、小学校の担任だった佐藤先生とばったり会ったよ(同:88)=下線は原文のまま)と同じ機能である。この例で、聞き手にとって「佐藤先生」は、固有名詞として捉えることはできても、名詞修飾節なしで同定はできない名詞句である。なぜなら、同定できれば「昨日ね、佐藤先生とばったり会ったよ」とも言えるはずだからである。この場合、新規導入であり、「小学校の担任だった」という名詞修飾節は、情動的に必須である。

「キミがいる」の用例中の「キミ」は、存在文により導入されて話し手と談話参与者との関係性を名詞修飾節で表し、その属性が談話全体で語られる事態の理由となっているものと考えられる。

4.2 冗長さの排除

状況描写や参与者の動作・性状描写、さらに心情描写の場合には、よりコンパクトな文を用いるために名詞修飾節が用いられる。これは、日本語記述文法研究会編(2008:87ff)の②の用法である。この場合の非限定的名詞修飾は、逆接、原因・理由、継起、付帯状況といった背景的事態を表し、主節と関係すると考えられる。

やがて訪れた 夕闇 に 一輪の花火が散りゆく
「綺麗」ささやくその声に 隠された 嘘があると 僕は気づかずにいた

(作詞：水野良樹「真夏のエレジー」)

明日を信じ続ける 君 は 誰よりも頑張ってる 君 は
現在(いま)を抱きしめて 未来に恋して 前だけ見てる

(作詞：吉岡聖恵「GOLDEN GIRL」)

上の例では、名詞修飾表現となっている「訪れた夕闇に」が、「夕闇が訪れて」のように継起的意味をもつ複文表現で言い換えても、言い表す内容に大きな変化はない。2番目の例は、名詞修飾節が理由となって主節につながっていると考えられる。

では、これらの名詞修飾表現が用いられる動機は何であろうか。一般に、名詞修飾表現を用いたほ

うが「一輪の花火が散りゆく」「前だけ見てる」という主節が際立って聞こえると説明がなされるが、やはり、文脈を考えれば、「夕闇」という場が設定され、その中で「花火が散りゆ」き、「嘘」に「気づかずにいた」と述べることは、連用的に「夕闇が訪れて」と言うよりも名詞修飾表現を用いたほうが明示的になる。また、後の例も、「君」を主語にして繰り返すには、やはり名詞修飾でたたみかけたほうが際立つといったところであろう。

ただ、それでも名詞修飾使用の動機としてはやや弱い。やはり、非限定的名詞修飾は、次のような場合により有効な表現手段となる。

さよならを 抱きしめて あたしまた 笑うんだ
星の無い Tokyo¹にも ほら また朝が来た

(作詞：水野良樹「Good Morning」)

素直になれない ふたりの
もどかしいこの距離を越えたい

(作詞：水野良樹「キラリ」)

上記用例を述定すれば、「Tokyoには星がないけれど、そのTokyoにもほらまた朝が来た」、および「ふたりは素直になれないけれど、ふたりのもどかしいこの距離を越えたい」ということになる。上の例は、副助詞「も」があることも手伝って、述定文後半の「Tokyoにも」は省略すると意図が異なって示されてしまう。一方、下の例は、「ふたりが素直になれない」ことと、「ふたりの距離」という主語と所有関係という2つの格がずれている。背景的事態を表す非限定的名詞修飾は、このような格のずれがある場合により強い動機で用いられやすいと考えられる。

このように、状況描写や参与者の動作・性状描写、さらに心情描写の場合、主節と従属節両方の述語に対し、被修飾名詞の格がずれているときには、非限定的名詞修飾を用いると多くの文節間関係を表す助詞が省略でき、コンパクトな文に収まる。歌詞という文体を考えれば、大きな使用動機となる。

同様に冗長さを回避する動機があると考えられるのが、3.2節で④として挙げた、思考や認識、感情、知覚などの動詞によって要求される事態内容が名詞修飾節となる用法である。

失うことに憂いは無く まとわりついた 君の 残り香 それが憎いだけ

君を愛して 君に抱かれて 二度と会えない 女 と気づいてたのに 「さよなら」

(作詞：水野良樹「真夏のエレジー」¹⁾)

これは、単に、「君の残り香が憎い」わけではなく、「君の残り香がまとわりついていることが憎い」という意味であり、名詞修飾表現でなくても述定表現で同義に表現できる。この場合も、「こと」や「の」など、体言相当に変換する機能語の使用が冗長さを生じることから、名詞修飾表現が用いられやすいと考えられよう。

¹ この「真夏のエレジー」には、ほかに2例、同様の認識を表す述語を主節にもつ表現が存在する。

- ・「綺麗」ささやくその声に 隠された 嘘 があると 僕は気づかずにいた
- ・「素敵」うそぶくその声に 秘められた 意味 があると 君は気づかずにいた

この2例は、「があると」を介する分、この類の典型的な用例とは異なる。述定するのであれば「嘘が隠されていると」「意味が秘められていると」のように言えるこれらの例は、「があると」存在表現にする分、名詞修飾表現を用いたほうが冗長である。これを、存在の際立たせなどと説明することもできようが、「嘘が隠されている」でも状態であり、その差を明確にするだけの理由は見当たらない。保留にして考えてみたい。

4.3 談話構文的な装定の必要性

冗長さの解消以外にも、名詞で出来事を含み込む名詞修飾表現は、次のような理由で用いられる。第一に、名詞句の並置のためである。

泣き出した空 流れるその雲 伝う涙がまた邪魔をする

(作詞：山下穂尊「マイステージ」)

「空」と「雲」と「涙」が（「僕ら」の）邪魔をすると読むとすると、3つの主語は、それぞれ名詞でなければならない。そこに背景となる「泣き出した」「流れる」「伝う」が添えられ、しかも、それらが縁語としてまとめられて主語となる出来事を形成している。

第二に、名詞で揃える必要性が、文を越えて存在する場合がある。次のような同格表現である。

電車から見えたのは いくつかのおもかけ
ふたりで通った春の大橋

(作詞：水野良樹「SAKURA」)

「おもかけ」とは何か。その答えが次の行に「ふたりで通った春の大橋」であると示されている。「おもかけ」と同格で表現するためには、次の文を名詞で終わらせなければならないが、そのために付加情報を修飾節に込めている。

また、主節あるいは主節が連なる文連続において、名詞句がどのように用いられるかによって、名詞修飾表現の使用が動機づけられることもある。

つる思いを打ち明けた 大きくなつてくれた
初めて握る左手は あたしよりもふるえていた
恥ずかしがり屋のあなたは いつもやたらと早足で
スキがあればじゃれつこうと たくらむあたし悩ませた

(作詞：水野良樹「コイスルオトメ」)

一行目は、3節で見た内容的限定である。これは、非限定的名詞修飾ではないが、助動詞「た」で終わる3文が物語として場面展開するよう、背景化され装定されている。「初めて握る左手」は、限定の機能はもたず「あなたの左手」と特定されているが、同様に背景化の必要性からの装定である。これらは、すべて主文末の時間的展開を明示化するための技法である。

一方、後半の2行に見られる名詞修飾節は、それぞれ理由と逆接として主節との意味的關係を有しつつ、主節の「あなたはやたらと早足で（あることで）あたしを悩ませた」との一文の流れをよくしている。

さらに、技巧が理由となることもある。

書きかけた手紙には 「元気でいるよ」と 小さな嘘は 見透かされるね

(作詞：水野良樹「SAKURA」)

1行目の「書きかけた」の「手紙」に対する機能は何であろうか。「手紙」は、それ自体では話し手・聞き手双方に同定されない不定名詞である。しかし、この文脈において、「手紙」は、不定であっても、談話上、かまわない。「手紙には『元気でいるよ』と書きかけた」と歌っても文意は通る。む

しろ、「『元気であるよ』と」の後の述部がない不完全な文よりも、出来事としては「手紙には～書きかけた」のほうが理解しやすい。

それをあえて名詞修飾表現を用いることで得られる効果は何か。それは、「『元気であるよ』と」の後の文の不完全さを表すポーズの挿入である。そこに躊躇い・戸惑いが示されているとすれば、すでに言語学の領域をはみ出すかもしれない。名詞修飾表現によって文の不完全な中断を意図したとまでは、言えるだろうか。

このように、非限定的名詞修飾表現は、談話構文的必要性がある場合にも用いられている。

4.4 まとめ

以上、非限定的名詞修飾の談話機能を実例から見て来た。結果、以下の機能が確認された。

- 被修飾名詞の円滑な導入
- 冗長さの排除
- 談話構文的な装定の必要性

非限定的名詞修飾がなぜ用いられるのかという観点から、従来の説を検証してきた。特に、連用修飾と代替可能な場合であっても、談話上の動機から用いざるを得ない（あるいは好まれる）ことがあると確認された。いずれにしても、単文で非限定的名詞修飾の機能を考えるには不十分である。

さて、名詞修飾の不使用についても考えておかなければならない。

今回分析した『超いきものばかり』には、名詞修飾節を用いない曲も2曲あった。1曲は「じょいふる」であり、もう1曲は「KISS KISS BANG BANG」である。いずれも形容詞（形容動詞・名詞+「の」を含む）による名詞修飾はあるが、節として名詞を修飾する表現は見当たらなかった。これら2曲に共通するのは、ノリの良さが前面に出ていて歌詞を味わわせる曲でない点である。「KISS KISS BANG BANG」には、次の歌詞がある。

Now is your chance! いますぐにその腕で抱き寄せて
キミは視線 (Me) をそらして ごまかすんだ もう? やだ!

(作詞：水野良樹「KISS KISS BANG BANG」)

「視線をそらしたキミは、ごまかすんだ」のように非限定的名詞修飾を用いても同内容を表すと考えられるが、それでは、客観的に分析して表現した印象を与えてしまう。名詞修飾表現は、形容詞のような軽い修飾であれば、計算された表現とはならず出来事叙述の流れを阻害しないが、名詞句と述語とを伴った節となると、通常の語順とは違って表現された分だけ「よく創られた」文(章)という印象を与えてしまう。軽いノリの曲に、そのような印象はそぐわない。

一方、どちらでも選べる選択の余地がある楽曲もある。

明日へと続く地図はいつだって その胸の中にあるから
涙振りはらって 笑顔振りしぼって 君^①は飛び出すよ 全速力で

果てしなく続く日々に取り込んで 誰よりも頑張ってる君^②は
今日を抱きしめて 明日に恋して 前だけ見てる

変わらない 自分にいらだって
君^③は雨の中 少しだけ泣いてるように見えたよ

(作詞：吉岡聖恵「GOLDEN GIRL」)

歌詞の3箇所「君」が用いられているが、「君^①」と「君^③」は、連用修飾の「て」の後にある。これを「君^②」のように名詞修飾表現にしても文意は通る。だが、「て」と連用修飾で繋がられているのには、それぞれに理由がある。「君^①」の前にある「涙振りはらって 笑顔振りしぼった君」のように装定してしまうと、「涙を振りはらう」と「笑顔を振りしぼる」が「飛び出す」と一連の動作にならず、「全速力」で駆けていくことにならない。また、「君^③」は、「泣いてる」の理由が明示的ではなくなる。ここで連用修飾を用いているのは、主節との連続性を感じさせようとしているためである。

名詞修飾表現を用いるということは、それだけ客観的・分析的表現を用いているということであり、中でもさらに随意的なものを用いる際には、そこに秘められた「計算」を味わわなければならない。一方、不使用は事態連続を一筋にスムーズに流す表現である。曲調によって、これらは選択される。

5. おわりに

現代日本語文法を授業で話そうとすると、15年前、本大学に来た頃とは同じ内容で話せないことが多くなった。今は分からなくとも将来役に立つといった授業者の空虚な理由付けは、現代の大学で通用なくなり、より関心を持たせる授業が必要になった。そのため、4年ほど前から歌謡曲の歌詞を用いて、その共有知識の上に現代日本語文法を話すようになった。学生にとって身近な素材から帰納的に文法規則へと導かせていくことは、アクティブラーニングが声高に叫ばれる昨今、教育的手法として現代的であり、学生からも受け入れられ能動的・主体的に取り組める授業となっている。ただ、実際に現代日本語研究の理論を応用して分析させると、複数の分類可能性があったりどちらとも言えない場合があったりで、困難に直面する学生が多く、難易度の高い授業となってしまう回もある。名詞修飾表現についても然りであった。もちろん、現実とはそんなものだが、テストでひとつの正解を追い求めてきた学生たちには、より深い理論付けと説明の工夫が必要となっている。

今回、あらためていきものがかりの歌詞を俎上に載せ分析を試みたが、比喩などの技巧が凝らされる歌謡曲の歌詞の中でも、彼らの歌詞はよく考えられ練られている。通常、格助詞などの装置によって表現されている関係性を、名詞修飾節という構造に押し込むことによって、関係性を潜在化し聞き手の想像に任せる（あるいは一部不問に付す）ことが可能となる。名詞修飾という構造は、暗示的であるがゆえに歌詞でも好まれ、この比喩という性質に合う。そのため、「きれいな」例文だけに当てはまる理論では足りない。しかし、歌謡曲の歌詞も、また日本語であり、分析の対象でなければならない。文法の授業では、真の日本語を分析できる能力を培わなければならない。いきものがかりの歌詞は、述定よりも「計算された」構造をもつ名詞修飾節に、多様な背景的情報を加えながら、聞き手に想像力を求め、通常、結びつかない関係性をも読み取れと要請することで、深み、言い換えれば、聞き手に委ねられた想像的（かつ創造的）文脈を与えている点で、文法教材としても適している。

今回残った問題点とともに、もう一度、大枠から名詞修飾表現を捉え直してみる必要があるが、そろそろ紙幅も尽きた。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6～複文』 くろしお出版
- 山田敏弘 (2014) 『あの歌詞はなぜ心に残るのか～Jポップの日本語力』 祥伝社新書
- 山田敏弘 (2014) 「指示詞付帯型名詞修飾節の機能」 『岐阜大学国語国文学』 40